

20. 文人の娼妓観

七月三日の『国学週刊』に「退園隨筆」が載っていて、郎葆辰の蟹を描くの詩のことが書かれていて、次のような一節がある。

“郎觀察葆辰は蟹の絵を描くのがうまく、京師で役人をしていたころ、境遇がとても貧しく、蟹を一匹書くと値は一金、それでかつかつ暮らしていた。平康の諸姉妹が金を集めて絵を求めると、郎はとても腹を立て、憤然として言った。わしの絵は風雅の人の部屋に置くべきもので、どうしてお前たちのために描けるものか！蓋しその絵を自ら重んずること、亦その品格を自ら重んずるがごとくであった。”

『冬心集拾遺』に雑画題記一卷があり、二条はすこぶる妙であるので、次に抄録する。

“雪中の蓮の花を絵に描いたものは世にない、気ままに自分の意境で描いてみた。鸕鷀〔かわう〕が堤にいるがもし果たしてこのようならば、亦一奇観である。”

“昨日雪中の蓮の花を描き、棕亭家の歌姫定定にやった。今晚は燭を切りながら水墨の蓮の花を描き、隣の老僧に贈った。連日の清々しい課題が、商売人の手に落ちなかったのは、幸いである。”

われわれは上の文章を読んで、二人の妓女に対する態度がとても違うと思う。郎葆辰はしかつめらしい道学者の顔つきで、傲慢頑強、近寄りがたいが、金冬心はとても寛容で、娼女と和尚を並べ挙げ、俗悪な男の上に置いている。しかし彼はそれによって紳士を罵倒するだけで、不満の色がとても明らか、畢竟儒家の態度で、ただ『古文觀止』の気が少ないというだけのことである。

芭蕉は日本近世の有名な詩人であり、俳句という小詩の開山の祖師であり、著した散文遊記も文学の名著である。元禄二年(1689)奥羽地方の旅行をし、著に紀行文一卷があり『奥の細道』と言ひ、彼の散文の傑作である。

“今日は親知らず、子知らず、犬戻し、返り駒など北國唯一の難所を過ぎ、とても疲れ、宿に着くと枕を引いて寝に着いた。前に一間を隔てて部屋の中に若い女の声がする、二人いるらしく、年寄りの男の話し声が混ざる。彼らの談話を聞いて、越後国新潟地方の妓女であることがわかった。彼女はお伊勢参りにゆき、男衆にこの関所まで送られ、明日は男を返すので、ちょうど手紙を書いて持って帰らせ、細々と言伝の話を言いつけているのであった。彼女の話では漁師の娘であったが、落ちぶれて妓女となり、海辺に漂白して、お客と定めなき縁を結び、日々その報いを受け、実に不幸であるという。聴きながら眠った。次の朝出発の時に彼女はわれわれに言った。道も知らずとても困難なので、怯えています、自分が遠くからついてゆくのを許してくれまいか、どうか法衣の力を借りて、慈悲を垂れたまい、仏果の縁が結ばれますようにと、言いながら涙を流した。われわれは答えた。かわいそうな話だが、ただわたしらは行く先々で逗留するので、別のお参りの人と一緒にゆく方が便利ではないか、神明のご加護があるので心配いりませんよと、そのまま出発した。心中一時にとっても哀れを覚えた。

Hitotsu ie ni,

Yujo mo netari ——

Hagi to tsuki.

（意味は、同じ家に、遊女も眠った、——萩と月）

わたしはこの句を曾良に告げ、書き取らせた。”*

われわれはこれには仏教の気味が多いと言える。実際芭蕉の詩はほとんど禅と道を精髓とするもので、しかも彼も僧形で、半生を行脚の生活で過ごした。彼のこうした態度は、儒家に比べてずっと優れている。現代人から見ればあるいはあまりに消極的すぎることになるかもしれないけれども。ドストエフスキーは『罪と罰』で、大学生のラスコールニコフがソフィアの面前に跪いて、“わたしは君に対して跪いているのではない、わたしは人類の一切の苦難の前に跪いているのだ”と言うことを記している。これはキリスト教の精神に基づいており、教会と修道士がどんなに人の意に叶わなくとも、このような偉大な精神は要するに佩服に値する。チャールズ・ルイ・フィリップ(Chales-Louis Philippe)の小説をたくさん読んだことはなく、ほとんど知らないのだが、批評家によると、彼の位置は大主教と淫書の作者の間にあり、彼は私娼を“可哀想な小聖徒”(Pauvre Petite Sainte)と称した。これはとてもわたしの意に叶っていて、彼はものの分かった人だと思った。それは明らかに一生の苦難を以って取り替えたものなのだけけれども。われわれは振り返ってもう一度郎葆辰をみよう、彼は結局プチブルで、別の道徳を持っているのもまさに怪しむに足りないのである。

芭蕉の紀行文はまことに訳しにくい。その一首の俳句はとりわけどうして好いか分からず、原文を抄録し、大意の訳を付けるしかなかった。この詩はそれほど好いようには見えないし、萩と月とを対比したのも、あまりに平凡なようだが、彼の風雅な句の中に“遊女”を入れたのは、すこぶる面白い、彼の情を忘れることのできない表情が現れている。中国の詩には妓女を詠んだものは多いが、そうした表情は滅多にみないようである。 七月六日補記。

※初出：1926年4月12日『語絲』第74期

*『おくのほそみち』 今日親しらず・子しらず・犬もどり・駒返しなど云北國一の難所を越えてつかれ侍れば、枕引きよせて寝ねたるに、一間隔てて面の方に、若き女の声二人計りきこゆ。年老いたるおのこの声も交て物語するをきけば、越後国新潟と云所の遊女成りし。伊勢参宮するとて、此関まで男送りて、あすは古郷にかへす文したためて、はかなき言伝などしやる也。白浪のよする汀に身をはふらかし、あまのこの世をあさまじう下りて、定めなき契り、日々の業因いかにつたなしと、物云をきくきく寝入て、あした旅立に、我々にむかひて、「行衛しらぬ旅路のうさ、あまり覚束なう悲しく侍れば、見えがくれにも御跡をしたひ侍ん。衣の上の御情に、大慈のめぐみをたれて結縁せさせ給へ」と涙を落とす。「不便の事には侍れども、我々は所々にてとどまる方おほし。只人の行くに任せて行くべし。神明の加護かならず恙なかるべし」と云捨てて出つつ、哀さしばらくやまざりけらし。

一つ家に遊女もねたり萩と月

曾良にかたれば書きとどめ侍る。 岩波書店版『日本古典文学大系』46『芭蕉文集』pp.91~92.